

北海道伊達高等学校

課程 全日制
 学科 普通科
 生徒数 515名

1 事業のねらい

生徒の多様化が指摘されている中、本校においても不登校傾向をはじめとする問題行動を有する生徒や高校生活に明確な目的意識がもてない生徒、社会性が身に付いていない生徒などが、高校生活に適応することができずに欠席を繰り返し、最終的に進路変更等の理由で退学する生徒が毎年何人か見受けられる。

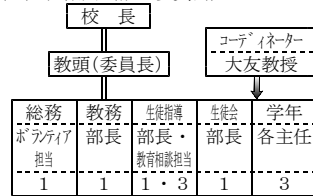
このような中、集団カウンセリングやボランティア活動をはじめとする体験的な学習によりコミュニケーション能力や自己有用感を育成し、不登校や中途退学の未然防止を図る。

2 取組の経過

(1) 月別実施計画

月	エンカウンター	研修	アセス	ピア・サポート	ボランティア
4	1年(新研・絆)				
8			1・2年		
10		全教員			
11	1年(HR単位)		1年(新登前)	1年(新登前)	1年(地域講)
12		1・2年担任	1・2年	1年(新登前)	3年(介護職)
1					3年(介護職)
2			1・2年		2年(講義)
3	1年(絆)	全教員			

(2) 組織図(推進委員会)



3 主な取組の内容

(1) 構成的グループエンカウンター(1年生全生徒)

○第1回:平成22年4月19日(月)
 場所:札幌NTT研修センター 時間:9:00~10:40
 講師:北海道大学大友教授 テーマ:「仲間を知る」
 内容:各種エクササイズの実施(全学年一斉展開)

○第2回:平成22年11月2日(火)・5日(金)
 場所:各HR教室 時間:50分
 講師:講師:北海道大学大友教授・各HR担任
 テーマ:「既成集団を壊して新しい仲間を作る」
 内容:エクササイズ「共同絵画」の実施(各HR単位)

11月2日(火) 5校時:大友教授からHR担任に講義・演習
 6校時:大友教授による「共同絵画」の実施(実施HR「1E」、各担任参観)

11月5日(金) 5~6校時:担任による「共同絵画」の実施(実施HR「1A~D」、終了後ピアサポート募集)

○第3回:平成23年3月16日(水)
 場所:本校体育館 時間:5・6校時
 講師:講師:北海道大学大友教授・各HR担任
 テーマ:「クラス替えを控えて」
 内容:各種エクササイズの実施(全学年一斉指導)



[第1回]



[第2回]

(2) 教員研修

対象:全教員(社は、1・2学年組、教育相談等) 場所:本校会議室他 実施時間:1時間程度
 実施内容:①学級環境適応調査について~調査の意義、効果的な活用方法、結果の分析~
 ②ピア・サポートの意義、効果的な進め方について
 ③集団カウンセリングの充実に向けて~発展的な取組に関する講義、演習~
 実施回数:3回(第1回:10月4日、第2回:12月21日、第3回:3月16日)
 ※平成22年3月8日:集団カウンセリングに関する研修(講義、演習)を実施済み

(3) アセス(学校環境適応感尺度)

対象:第1・2学年全生徒 場所:各HR教室 実施時間:1単位時間(20分) 担当:HR担任
 実施方法:調査の実施→担任、データ入力→副担任、データ処理・資料作成→推進委員
 実施回数:3回(第1回:8月26日、第2回:12月9日、第3回:2月17・18日)

(4) ピア・サポート(ピア・サポート・トレーニング)

目的:教員・生徒のピア・サポートに対する理解を深め、生徒同士による支援活動の推進を図る。
 対象:第1学年希望者(8名) 場所:教育相談室 時間:放課後15:10~16:30
 講師:スクールカウンセラー(岩田栄子氏)、教育相談担当教員

10月29日	教員に対するピア・サポートの意義・実施方法の説明
11月2日	生徒に対する参加者募集の呼びかけ(エンカウンター終了後)
11月16日	ピア・サポート・トレーニングの実施
12月21日	{3回:11/16、12/7、12/21}



[ピア・サポート・トレーニング]

(5) ボランティア活動

目的:ボランティア活動を通して異世代交流を促進し、コミュニケーション能力や自己有用感の一層の向上を図る。

対象:全校生徒(各学年単位)
 場所:本校体育館・介護福祉施設等 時間:2単位時間
 実施体制:「ボランティア活動協力者会議」の設置

8月	19日	「協力者会議」開催
10月	22日	校外清掃(1年生)
12月	15・17日	介護福祉施設との交流ボランティア(3年生)
1月	20・21日	伊達雪祭り雪像づくりボランティア(2年生)
2月	4~10日(5日間)	ボランティアマップの作成
3月	下旬	



[介護福祉施設交流ボランティア 3年生]

4 成果と課題

○ 成果

・集団カウンセリングや異世代交流を通して、生徒に人間関係を形成する力やコミュニケーションスキルを身に付けさせ、学校不適応の防止を図ることができた。

中途退学者数(在籍比)の推移: H21年度 3.2 → H22年度 2.1

・生徒の学校環境に対する意識を調査・分析し、個々の生徒や集団の指導に生かすことにより、生徒の学校適応感が向上するとともに、望ましいHR・集団づくりが促進された。

学校適応感尺度の推移(「教師サポート」因子:第1回調査→第3回調査 +10%、「友人サポート」因子:第1回調査→第3回調査 +4%)

・教員の予防的・開発的教育相談に対する理解が深まるとともに、組織的・系統的な教育相談体制の基礎が構築された。

学校評価(自己評価)結果の推移(評価項目:「教育相談の充実を図り中途退学やいじめの防止に努めているか」: H21年度 2.9→H22年度 3.0)

○ 課題

・教員の集団カウンセリングの指導力の一層の向上
 ・学級環境適応調査(学校環境適応感尺度:アセス)結果のより効果的な活用

○ 次年度に向けて

・集団カウンセリングに関する教職員研修の実施
 ・学校環境適応調査結果を利用したケーススタディ及びクラス経営への活用